

氏名	重政 周平
ヨミガナ	シゲマサ シュウヘイ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第535号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 線と間隙の相克 〈作品〉 間隙 相克 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	齋藤典彦
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	植田 一穂
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	梅原 幸雄
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	

（論文内容の要旨）

絵の画面に生まれる線は、その表情や形態を生み出すために、様々な手法で描かれる。しかし、それは一本の線だけでなく、その周りに描かれる様々な痕跡との相関によって成り立っている。本論文では、日本画素材を使った絵画制作で、「線と余白の調和」から、密集した線による形態と間隙、そこから生まれる「線と間隙の相克」へと展開した変化と表現について論述した。

私の制作は、生活風景の中にある幾何的な形態や直線、曲線などから感じる印象をもとに、自身の思う理想のフォルムを再構築することで、独自の美と絵画空間を創造しようと試みている。その行程は、画面内で描く、消す、再び描き起こすといった行為を繰り返し、そこに現れた線によって形態を探ることが基本になる。まず当初は、余白を意識して白地の画面に線を描き、線と余白の調和を探った。次に、主張する強い線を求め、画面全体を線によって埋め尽くす構成を試みた。線の集積はやがて形態となり、そこに新たに小さな余白の間隙が生まれた。そうしてできた線の集積と間隙は、どちらも互いに主張する相克の関係となり、力強い表現となっていた。また、展示空間を意識した高さのある画面構成にすることで、大きさに負けない重量感のある線と間隙が、圧倒的な相克の画面を生み出す状況をめざしてきた。その展開と経緯を、本論文では3章構成で論述した。

第1章では線を存在させるための余白との成り立ちと、絵画のもうひとつの余白ともいえる展示空間について分析した。幼少時に見ていた家の複雑な骨組みの天井や、おもちゃの設計図の線のイメージを絵画に求めていた私は下絵の白紙に模索して描かれた線に近い表現を感じた。探るように描かれる下絵の線や汚れは、余白との調和によって独自の美しさを作り出す。それは下絵だけではなく古来の余白思考を取り入れた作品からも様々な線と余白の表現があった。さらに、展示空間と余白の関係を探り、画面内に余白が存在しなくても、展示空間を取り込むことで、余白と同様の調和の表現を探った。線に関していえば、これは展示空間の建築の線も、作品の一部として取り込むということであり、作品の数、展示方法、画面の

大きさと分析をし、その中のひとつの空間表現の方法として、大型作品の視覚心理変化に着目した。

第2章では当初のイメージである天井の複雑な構造と、それを見上げた時に感じる圧迫感を絵画で表現するために、“線の集積”と、そこから生まれる小さな余白の“間隙”に着目した。間隙は、あくまで“すき間”にすぎないが、線の集積の中で逆に強い存在となって画面に影響を与える。同時に線も力強い線となり、互いに主張する両者は、“相克”の関係となって新たな表現の可能性を生んだ。線の集積が画面を複雑にしている一方で、間隙の地はフラットな空間を感じさせる。線の集積の奥にあるこの隠れた空間は、数々の線の強い主張と対局をなすように、フラットな面として確かな存在感を主張していた。調和的な大きな間だけが余白なのではなく、線と線の間小さな間隙もまた、画面全体を刺激する隠れた余白なのである。また、線と間隙の相克は、力強い表現に属すが、その力強さをさらに増幅して迫力を持たせ、天井を見上げるイメージにも繋がる形状として、鑑賞者に、画面の大きさがどのような印象を与えるのか、通常の大サイズの絵と、大型の絵で比較検証をした。大型画面の場合、その中に鑑賞者自身がいるような感覚を与え、線と間隙の相克を体感しているような印象を与えることができた。いわば、画面と展示空間が連続している感覚であった。高さのある大型の画面にすることで、見る者を呑み込むような迫力を作り出し、画面の中にあるような一体感を生み出した。

第3章では、第1章、第2章を踏まえ、「線と間隙の相克」の集大成となる提出作品「間隙」と「相克」について考察の過程を述べた。その作品は展示空間に負けないために高さのある画面、そして空間の広がり意識して連作とした。作品の数としては、現状の数より多くなると横の広がりが強調され、高さの印象は無くなってしまふ。連作は最低限の広がり十分のため、提出作品ではあえて2点のみとした。この関係は、無意識に互いを見比べる鑑賞となるため、高さを維持したまま互いの繋がりを感じさせることができる。そして、連作としての繋がりをつくるための2点に共通させるための色合いの選定を行った。画面に描いた岩絵具を洗い流す手法をしていた私は、そうしたある種の濁りによって逆に生きてくる古名画の古色に着目した。そして、それをベースとした画面に黒に近い色である藍色の線の集合体を構成して「線と間隙の相克」を作り出した。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、様々に交錯する直線の集積とそこに生まれる間隙が、“相克”の関係で互いの強度を強めながら大画面に結実していく創作の試行と展開を論述したものである。

作品は一見、直線が激しくぶつかりあう抽象絵画だが、イメージの原点はシンプルである。幼少時、朝めざめた時に最初に目にした大小の木材の骨組からなる吹き抜けの天井がそれだという。覆い被さるような天井の圧迫感が、のちの大画面へとつながっていくのだが、筆者にとってその天井は、家にいる安心感を感じさせるものでもあったという。おもちゃの設計図の線も原点の一つらしく、筆者の線への関心が、安心や楽しさから始まったことがわかる。そのためか、当初筆者は線と余白が“調和”したあり方を探っており、そこから両者が“相克”する強い画面の追求へと展開している。一貫しているのは、線は余白(間隙)があってこそ生きると考えていることであり、その強さを求めて“調和”から“相克”へと展開したことが分かる。

第1章「線と余白の調和」では、幼少時の記憶に始まり、長谷川等伯「松林図」など過去作品にその事例を求め、また障壁画と室内空間にも同じ関係を見出して、展示空間と調和した大画面を模索し始めている。モチーフとしては、学部時代は植物に線を求めたのに対して、建築物の直線、とくに鉄塔の力強い直線(鉄骨)に魅力を感じたことが、そこでのすき間(間隙)に、調和ではない線との“相克”を見出す契機となっている。第2章「線と間隙の相克」では、イメージモデルをトラス構造の鉄塔と定め、線、間隙それぞれの迫力ある描写と、両者の相克による効果の相乗化を模索している。色彩、構図、質感、素材、技法の試行と選択、決定までのプロセスが、やや詳しすぎる程に記述されているが、通常は明かされないアトリエ内の制作工程として興味深い。ここでのもう一つの重要なテーマが、展示空間を前提とする“相克”の大画面形式の決定であり、筆者は横長ではなく、見上げる観者をのみこむような縦長画面に、圧迫感と一体感を生む圧倒的迫力を求めている。そして第3章「提出作品」で、巨大な二連作「間隙」「相克」につい

て解説している。

提出作品は各縦3.6m×横1.8mの大画面で、ちょうど6畳一間の大きさになっている。6畳一間を立てて壁におくと、この高さになることを初めて知ったが、意図的か偶然か、幼少時に筆者が見上げた天井サイズを選択したかのようにも思われた。筆者の身体感覚の記憶を反映しているのかもしれない。

論考は大部分が表現上の試行錯誤の記述になっており、やや過剰な感もあるが、論述展開と構成は明快で読みやすい。巨大な抽象作品が完成するまでの意識と試行のプロセスがよく分かる。学位論文として十分な内容として、審査会の承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

申請者は、画面上で描く、消す、再び描き起こすという行為を意識的に繰り返す制作スタイルを一貫して行ってきた。これは、生活風景の中にある幾何学的な形態などの印象を自身の思う理想のフォルムとして画面上に再構築し、そこに独自の美と絵画空間を創造したいという申請者の表現に対する強い思いからくるものである。この思いは、幼少期より馴染んだ自宅の天井の梁やプラモデルの設計図等、複雑に線が交差するフォルムへの興味が基になっているという。当初は画面内での線と余白の関係を意識した「線と余白の調和」を探っていたが、やがて主張する強い線を求め、画面全体を線によって埋め尽くす構成を試みるようになる。その結果、密集した線による形態とそこから生まれる小さな余白の関係「線と間隙の相克」へと興味は移行していく。論文はその興味、関心が変化していく過程を追い考察したものであり、提出作品はその実践である。

提出作品「相克」と「間隙」は対をなすものであり、1点が3m×3mの巨大な作品は展示場所である大学美術館の空間を意識し制作され、圧倒的な大きさで鑑賞者との一体化を図る。モチーフとなった鉄塔を一度分解し、それを画面上で再構成させるスタイルは近年申請者が取り組んでいる一連の作品の集大成と言えるもので、描く、消す、再び描き起こすという作業を執拗に繰り返し緊張感の増した画面は、その作品の大きさとも相まって鑑賞者を取り込み圧倒する。密度と、画材である岩絵の具の物質感をともなった画面の完成度は高い。しかしながら、“間隙”を意識するがゆえか、多くの線がマスキングによるいわゆる“ヌケ”の線の使用に終始しており、実態を伴い意志を持って引かれた線とのバランスが崩れたことが若干の構成の弱さにつながり、申請者が求める“相克”を十分に生んでいないように思われる。表現内容と作品の大きさとの関係も含め、今後における申請者の課題となろう。

技術と思索で裏打ちされ、高いレベルで作品を成立させたことを評価するとともに、新たな展開にも期待したい。審査会においては、審査員全員が申請者の一連の作品を高く評価し、学位にふさわしい作品であると判断し合格とした。

(総合審査結果の要旨)

申請者は、生活風景の中にある幾何学的な形態や直線、曲線などから感じる印象をもとに、自身の思う理想のフォルムを再構築し、独自の美と絵画空間を創造しようと試みる。描く、消す、再び描き起こすといった行為の繰り返しにより現れた線の集積は、やがて形態となり、多くの小さな余白の間隙が生まれる。それらの線の集積と間隙は、互いに主張する相克の関係となり、展示空間を意識した高さのある画面構成とともに、圧倒的な相克の画面を生み出す。

論文において申請者は、そのような自身の作品について、第1章線と余白の調和 - 無から始まる痕跡としての形態では、自身の理想の線の元である、幼少期より馴染んだ自宅の天井の梁や、プラモデルなどの設計図を例に、線と余白の関係と、もう一つの余白ともいえる展示空間と作品の調和について分析した。第2章線と間隙の相克 - 線の集積が生む間隙では、線と、その集積が生む小さな余白の間隙との相克、高さのある画面が生む視覚的、心理的効果について述べた。第3章では、以上の論考を基に、展示空間と、二つの作品の関係性をも含んだ「線と間隙の相克」による提出作品、「間隙」と「相克」について解説、

論述した。

以上のように自身の制作を学部時代から丁寧に検証し、日本画素材を使った絵画制作における「線と余白の調和」から、密集した線による形態と間隙、そこから生まれる「線と間隙の相克」へと展開した変化と表現について論述した本論文は、学位論文として十分評価できる。

提出作品「間隙」と「相克」は、線と間隙との様々な変奏のうちの集大成ともいえる力作である。約3m×3mという展示室の高さに合わせた巨大な作品は、展示空間を取り込みつつ、画面の岩絵具の物質感とともに空間に起立してある。鉄塔をモチーフとしながらも、画面上で繰り返し描かれ、また消される線と間隙は、大きさ、マチエールとともに、見るものに迫ってくる。しかしながら、探索の結果として生まれた線や間隙は、そのような美点は持ちながらも、多くはマスキングにより残された結果である。それゆえ強い意志により引かれ、あるいは塗りこめられたものでない弱さも併せ持つ。この点は、大きさを伴わない作品においてはもちろんのこと、今後における大きな課題であろう。

以上のように、論文、作品ともに、申請者のたゆまない努力と試行の結果として、学位にふさわしい充実したものであると審査員全員が高く評価し、合格と判定した。